

**<研究ノート>江戸時代前・中期の入会地と地域秩序  
： 武蔵国豊島郡峡田領「赤塚郷六か村」の自治と徳  
丸原をめぐって**

著者	若曽根 了太
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	60
ページ	82-102
発行年	2003-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10778">http://hdl.handle.net/10114/10778</a>

## 〈研究ノート〉

## 江戸時代前・中期の入会地と地域秩序

——武蔵国豊島郡峡田領「赤塚郷六か村」の自治と徳丸原をめぐる——

若曾 根了太

## はじめに

江戸時代の村について、その他律性を強調する見解、あるいは、それとは逆に自律性を強調する見解が存在する。

前者の視点に立つ水林彪氏は、江戸時代の村は領主権力を代執行する支配請負組織としての側面を有しており、この側面が強化されたことに、幕藩体制下の村の特徴があったとされている。村が村請事務を担う末端組織として位置づけられているのである。

それに対して水本邦彦氏は、村請制は村請事務を請け負う村の側に能動性があつたからこそ成立しえたとして、村の自律性を強調されている。

氏は、村の自律性を示すにあたつて、一七世紀の村における村惣中の機能に着目し、それを以下のように評価する。

百姓は彼らの生活・生産が一定程度保障されるために村惣中に帰属していた。村惣中は百姓にとって自立した公的機関として機能していたのである。また、国家にとつての村惣中は、統治を可

能とするために依拠する機能を有した組織であつた。以上のことから、一七世紀の国家と村は構造的に村惣中の機能を媒介として、両者がもたれあつた相互依存の関係だったのである。

以上のような両者の見解は、一見すると対立関係にある。しかしこれは共同体の自律の度合いの問題であり、いわば捉え方の問題である。どちらも国家と村の関係＝相互依存の関係を前提としており、それでは村の他律性の強調か自律性の強調かを決めるのは、捉え方の問題となつてしまふと考えられる。そしていいかえれば、両者の見解はそれぞれ背反しうるものともいえる。

では、この両者の見解の両側面を組み込んだ形での村の像をどう描いたらいいのであろうか。

そこで本稿では、地域社会に焦点をあて、それを自治の視点から捉え、そこで地域の構成要素たる村がどう位置づくのかを考察していく。支配の末端組織的な要素と自治の主体としての要素の両面をもつた江戸時代の村が、江戸時代の地域社会の有する自治の機能において、どういった役割を果たしたのかの分析である。

地域の視点から村を捉え返すことにより、支配の末端組織的性格と自治的性格の両面を組み込んだ村の新たな位置づけができると考えられるのである。

そこで、村を越えた地域社会についてであるが、本稿では、その形成の契機を村々の入会地利用におく。深谷克己氏は、山野の共同的所持が百姓の社会的結合を支えるとしており、その指摘に基づき近年では、大塚英二氏が入会地の問題に地域論としてアプローチしている。<sup>(3)</sup>すなわち山野をめぐる分析は、地域社会の問題の考察に有効だと考えられてきているのである。

また、自治の視点についてであるが、本稿では地域社会の有する自治を、地域内の一定の空間についての地域住民の認識を基に、地域住民の意識が反映され、新たな秩序が主体的に形成されていく状態に見出されると定義づける。つまり、入会地をめぐる地域の秩序形成が、地域住民の意識をもとにしていたことを、地域の自治として捉えていくのである。

対象地域は、荒川下流域の右岸に位置する秣場＝徳丸原と、それを入会利用する武蔵国豊島郡峡田領上赤塚村・下赤塚村・成増村・徳丸本村・徳丸脇村・四ツ葉村の六か村（現東京都板橋区赤塚・徳丸）とする。

この地域の研究として、近年小暮正利氏が、元禄期以降の徳丸原開発をめぐる展開される幕府と村々とのせめぎあいを描いている。<sup>(5)</sup>そこで氏は、村々にとって秣は非常に重要なものであり、そのために開発に反対したとされている。この指摘は確かに肯首しうる。村の住民達は、徳丸原の秣を田畑の蒔敷として使用して

いた。当時蒔敷は田畑の生産力の向上に大きな役割を果たしていた。よって秣が使えなくなるとは、生産活動を行う上で支障をきたすことにつながったのであり、だからこそ村々は、秣場開発に反対したといえる。

では、氏の描いた地域による徳丸原開発の反対運動は、地域の歴史的流れの中にどう位置づくのであろうか。いいかえれば、地域が歴史的に形成してきた入会地をめぐる秩序において、元禄期の地域による土地開発の反対運動は、どういった意味をもち、そしてその後の地域の秩序にどういった影響を与えたのであろうか。

以上のような問題関心をもって、本稿では以下のように進めていく。第一節においては、対象となる六か村の概況と歴史の変遷についてを示していく。第二節では、徳丸原の利用における慣習の変化の契機となる元禄期を対象とし、具体的な慣習変化とそれに伴う地域住民の意識の変化を捉える。そして第三節では、地域住民の意識がどう反映されて、徳丸原をめぐる新たな地域の秩序が形成されたのかを示していくこととする。

## 一 中・近世移行期の赤塚郷六か村

### 1 赤塚郷について

徳丸原の秣場を入会利用する武蔵国豊島郡峡田領の上赤塚村・下赤塚村・成増村・徳丸本村・脇村・四ツ葉村の六か村は、図1に示されるように、江戸の北西に位置している。江戸からの距離は四里程で、北は荒川、南は川越街道、西は白子川、東は前谷津



川にはさまれた地域となっている。

北に接する荒川は豊島郡と足立郡、西の白子川は豊島郡と新羅（新座）郡との境であった。また、南の川越街道は、江戸時代においては下練馬村、江戸時代以前においては練馬郷との境であった。<sup>6)</sup> 東の前谷津川は、江戸時代は西台村、江戸時代以前においては志村庄との境であった。よってこの地域は、江戸時代以前から一定の地域的枠組みが確定されていたといえる。

『新編武蔵風土記稿』の成増村の項によれば、「成増村ハ、元赤塚村ノ内ナリ、後分村シテ石成村トイヘリ、高麗郡新堀村農家ニ蔵スル応安元年五月ノ文書ニ、高麗四郎左衛門入道力領地武蔵国赤塚郷内石成村半分ト記セシ、是ナリ」と記されており、成増村は石成村と称し、赤塚郷を構成していたことが示されている。<sup>9)</sup>

また、『小田原衆所領役帳』には「赤塚六ヶ村」の記載が見られ、これについて『新編武蔵風土記稿』は「北條役帳二十八貫文江戸赤塚六ヶ村千葉殿ト見ユ、此六村ハ今ノ上・下赤塚及ヒ徳丸本村・徳丸脇村・徳丸四ツ葉・成増ノ村々ナリ」と記している。<sup>10)</sup> 赤塚六ヶ村は上赤塚村・下赤塚村・徳丸本村・脇村・四ツ葉村・成増村であったとしているのである。この記載は、地理的な要素から妥当なものであると考えられる。

以上のことから六ヶ村は、江戸時代以前は赤塚郷を構成していたとしてよいと考えられる。つまり、山野の共同的所持は、百姓の社会的結合を支える役割を果たすものであったという深谷克己氏、大塚英二氏の指摘に従えば、この六ヶ村は、秣場の入会利用という行為を通じて、赤塚郷としての地域的つながりを江戸時代

においても残存させた地域と位置づけられる。よって本稿では、近世以前からの連続性を重視して、この六ヶ村を赤塚郷六ヶ村と規定して進めていく。

さて、赤塚郷についてであるが、ここでは小松寿治氏の検討をもとにして、その歴史の変遷を簡単に記す。<sup>11)</sup>

赤塚郷についての初見史料は、元弘三年（一二三三）八月のものとして推定される「足利尊氏・同直義所領目録」である。また、「和名類聚抄」には赤塚郷の記載がみられない。つまり、赤塚郷の成立は一〇〜一四世紀の間である。よって小松氏は赤塚郷を「中世郷」と位置づけられている。

「足利尊氏・同直義所領目録」によると、赤塚郷は足利直義の所領となっている。観応三年（一二三二）二月の直義死後は、正室渋川頼子の所領となり、その後永徳三年（一三八三）二月に鹿王院領となった。

康正二年（一四五六）一月、下総国の守護である千葉氏が享徳の乱の余波から内乱を起こした。その結果、千葉実胤・自胤兄弟は、関東管領山内上杉氏を頼って武蔵国に逃れた。そして、実胤・自胤兄弟は、それぞれ武蔵国の赤塚・石浜城を本拠とした。実胤が赤塚城、自胤が石浜城に入ったのである。これは、堀越公方足利政知と前後して、古河公方足利成氏追討のため関東に下向してきた探題渋川義鏡の取りなしによるとされている。

これに対し鹿王院側は反発、再三にわたって赤塚郷の返還を求めた。幕府も千葉氏に返還を命じた。しかし、『小田原衆所領役帳』に千葉殿が赤塚六ヶ村を所領としていることが記されている。こ

のことから、千葉氏は赤塚郷を返還せず、戦国期に至るまで赤塚郷を所領としていたといえる。

2 赤塚郷の村切

近世初期になると、赤塚郷は村切されて、赤塚村と徳丸村が創

出される。

表1 赤塚郷六カ村の村高		単位：石		
村名	慶安年間 (1648～52)		元禄15年11月 (1702)	天保5年12月 (1834)
徳丸村	1094.623	徳丸本村	1000.897	1000.897
		脇 村	314.242	316.799
		四ツ葉村	311.097	328.1815
赤塚村	1994.518	上赤塚村	1000.897	989.373
		下赤塚村	1468.107	1468.094
		成増村	392.141	392.141

〔出典〕『武蔵田園簿』（東京大学史料編纂所蔵）、『元禄郷帳』（国立公文書館内閣文庫蔵）、『天保郷帳』（国立公文書館内閣文庫蔵）

徳丸村では慶長三年（一五九八）九月、赤塚村では同年一〇月に、板倉勝重によって検地が実施された。正確な村切の時期は不明であるが、慶長検地が実施された時には既に二か村に村切されていたといえる。

検地実施に際し、赤塚郷領主千葉氏の菩提寺である松月院

（下赤塚村内）では寺領帳が作成されており、表紙には「赤塚上郷」と記載されている。このことは赤塚郷が上下に二分して捉えられ、つまり赤塚村＝赤塚上郷であったことが示されるといえる。赤塚郷には、検地以前から上郷・下郷という二つの地域的なまとまりが存在しており、赤塚上郷が赤塚村、赤塚下郷が徳丸村と名称を変えて継承されたと考えられるのである。

赤塚村は後の上赤塚村・下赤塚村・成増村の三か村、徳丸村は徳丸本村・脇村・四ツ葉村の範囲となる。

以上のことから赤塚郷には、後の徳丸村・赤塚村の範囲となる地域的なまとまりが赤塚上郷・下郷として存在していたこと、そして、郷から村へ自立しえる環境が慶長期には整っていたことが指摘できる。

3 赤塚郷六か村の成立と概況

赤塚村と徳丸村は、それぞれ村落として機能し、年貢も赤塚村と徳丸村を単位として上納された。しかし、赤塚村と徳丸村は前述の通り、それぞれが分村し、上赤塚村・下赤塚村・成増村・徳丸本村・脇村・四ツ葉村が成立する。では、分村時期はいつ頃であろ

か。

寛文一〇年（一六七〇）一〇月までの年貢割付状の宛所は徳丸村となっているが、寛文一一年（一六七一）一〇月の年貢割付状の宛所は徳丸本村になっている。このことは、寛文一〇年一〇月から、翌年一〇月までの間に、徳丸村が徳丸本村・脇村・四ツ葉村に分村したことを示している。つまり、年貢割付状が各村に交

表 2 赤塚郷六カ村の概況

村	村の広さ	化政期	明治 5 年	
		戸数	戸数	人口
徳丸本村	約東西47町、南北28町	146	135	864
脇村		35	38	208
四ツ葉村	東西南北共、3町余り	47	43	250
上赤塚村	東西15町余り、南北26町	93	109	690
下赤塚村	東西13町、南北28町余	207	222	1290
成増村	東西6町、南北12町余	69	85	502

〔出典〕 村面積および化政期の人口は『新編武蔵風土記稿』豊嶋郡巻之六、明治 5 年の人口は『東京府志料』（東京都公文書館蔵）。  
なお、安井家文書では宝暦12年(1762) 3 月「徳丸本村宗門人別帳」が確認される。これによると徳丸本村の人口は651人(うち女308人)である。

付されたという事実は、分村した各村が、寛文一一年一〇月には村請制村落として公認されたことを示しているのである。  
また、『元禄郷帳』によると、赤塚村・徳丸村は既にそれぞれが分村し、六か村の村高が確定されている(表1)。この『元禄郷帳』の村高の記載は、慶安期から元禄期の間に六か村で行われた延宝二年(一六七四) 検地と元禄五年(一六九二) 検地の二つの検地のうち、前者より打ち出された村高である。それは、①元禄検地は新田開発された土地について行われた検地であること、②『元禄郷帳』には改出高を加えられなかったことから指摘できる。

以上のことから寛文期に村請制村落の主体として三か村が公認され、延宝期

には検地をもって三か村の地理的範囲が公法的に確定されたことがわかる。赤塚村に関してもほぼ同時期に三か村に分村したものと考えられる。

六か村の概況は、表1と表2に示した通りである。下赤塚村の村高は約千五百石弱、上赤塚村は千石余り、脇村を含めた徳丸本村も千三百石余りである。また、この三か村は家数も多い。よってこの三か村は大村であったことがわかる。

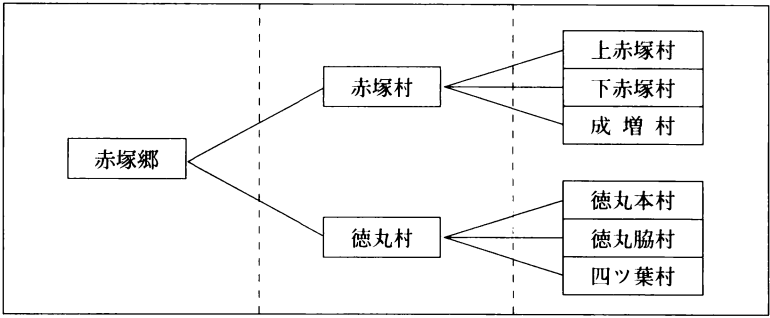
それに対し、成増村・四ツ葉村の村高は、三百石ほどであり、家数も少ない。そのため成増村は、「上赤塚ト合セ見ルベシ」として、上赤塚村の中に組み込まれて考えられることが多く、徳丸脇村もそれは同様であった。徳丸本村と脇村は「犬牙シテ辨シ難シ」状況で錯綜していたのである。また、四ツ葉村と徳丸本村・脇村は合わせて、「徳丸三分」として扱われることもあった。つまり、成増村は上赤塚村に組み込まれ、また徳丸本村・脇村・四ツ葉村は「徳丸三分」として合わせて扱われていたのである。

このことから上赤塚村・成増村・下赤塚村、徳丸三分の三地域は人口や村高などにおいてだいたい同じレベルの領域になることがわかる。これによって寛文・延宝期の赤塚郷六か村は、大きく分けて三つの地域性を有していたといえる。それは、この三地域の各地域を氏子圏とする鎮守が存在していたことから指摘できる。

4 赤塚郷六か村の領主

六か村の支配形態についてであるが、上赤塚村・下赤塚村・徳

図2 赤塚郷六か村の歴史的変遷



丸本村の三か村は江戸時代を通じて幕領であった。

これに対して、徳丸脇村は幕領と東叡山寛永寺領の相給地であり、また、徳丸四ツ葉村は全域が東叡山寛永寺領であった。四ツ葉村が東叡山領に移ったのは、宝永六年（一七〇九）のことであった。<sup>(22)</sup>

また、成増村は近世初期は幕領であったが、明暦三年（一六五七）十月に大屋権八に赤塚村のうちが知行地として与えられたことを始まりとして、一給の旗本領となつた。<sup>(23)</sup>

以上、第一節においては、六か村の概況について江戸時代以前からの流れのなかでみてきた。赤塚郷から赤塚村・徳丸村

の二村、そして赤塚郷六か村への分村という流れは図2に示される通りである。赤塚郷を枠とする地域的なつながりは、六か村成立後も、徳丸原の人会利用という行為を一つの契機として残っていたのである。

二 赤塚郷六か村の住民意識と秩序形成

1 徳丸原の秣場利用について

徳丸原は、馬・牛などの飼料の採草地である。この草を赤塚郷六か村の住民は、馬・牛の飼料や、田畑への刈敷として利用した。古島敏雄氏によると、採草地は刈敷給源・厩肥源たる秣供給源として地力維持に重要な要件であった。それは肥料の中心が、人糞尿・厩肥・山野の草木たる刈敷であり、そのうち人糞尿を除いて、その主たる供給源は山野にあるからである。秣場・採草地は、当時の人々が生産活動を行うにあたって重要な役割を担う株を生み出す土地であり、この確保は田畑の生産力の向上に大きく関わったのである。それは、六か村の地域住民にとっても同様であったと考えられる。六か村にとって徳丸原は、田畑の生産力を高める秣を採草することができ、価値のある土地だったといえよう。共同所持地について藤木久志氏は、中世における山野河海は、諸階層・諸集団がそれぞれの目的に応じて用益する「棲み分け的な共同の場」としての性格が濃厚であったとされている<sup>(25)</sup>。そこでの規範は村落レベルの共同体的な規範に根ざして自律的に展開したとし、このような共同体的な用益慣行を包摂することで領主支配が支えられたと位置づけられている。



また、近世における共同所持地について高木昭作氏は、統一権力樹立を果たした豊臣秀吉は、検地にあたって山野の大部分を高外地と設定し、高外地は秀吉の領有下にあるものとしたとされている。<sup>26)</sup>そして、この原則は徳川氏の時代にも継承され、野銭などの小物成徴収を通じて把握されることとなり、山野は耕地・屋敷地以外に個別領主の力がおよびにくい部分となったとされている。つまり山野の利用は在地の自律的な利益慣行をもって行われ、近世にも、その利用形態は継承されたのである。

では、六か村における徳丸原の利用についてはどうだったのであろうか。

まず、慶長検地においての徳丸原の位置づけであるが、検地帳には、徳丸原に関する記載は確認できない。<sup>27)</sup>徳丸原は、高請化されていまいのである。

また、徳丸原の由来について記された「新田芝畑のわけ」<sup>(28)</sup>の一条目には「貞享四卯迄ハ野銭も出シ不申候事」とある。六か村の地域住民は、貞享四年（一六八七）までは野銭を払わず、自由に秣を利用していたのである。

つまり徳丸原は、江戸時代に入っても幕府から直接的に把握されることはなかった。貞享四年までの徳丸原利用は、赤塚郷の時代から継承された慣習＝自由な採草形態がとられていたのである。

このような慣習における六か村の地域住民の徳丸原に対する意識は、①徳丸原は地域住民が秣場として利用する土地であり、②それはなおかつ当然のこと、というものであったといえる。当然

のことであるが故に明確に意識されなかったと考えられるが、長年継承されてきた徳丸原の慣習は地域住民に、徳丸原＝六か村の地域住民が秣場として利用すべき土地・環境であるという意識を根底に潜ませたと考えられる。

## 2 野銭上納の開始

「新田芝畑のわけ」の二条目には、「元禄元辰年御改ニ付、内見積りニ而百四拾丁歩と村方申上、反ニ永弐文つ、上納仕候事」と記されている。代官西山六郎兵衛が、徳丸原の土地の見積りの差し出しを命じた。そこで村方は一四〇町歩と上申して、元禄元年（一六八七）一月から一反に永弐文の野銭を納めることとなったのである。徳丸原の町歩は村方の自己申告をもって決定されていたことがうかがえる。

このような野銭上納の開始の背景には、この頃の町人請負による土地開発の活発化があった。寛文・延宝期（一六六一―一八一）は、明暦の大火（一六五七）後に急成長した材木商らの新興商人が、投資の場を江戸から近郊農村に移し、土地開発を活発に行った時期であった。柳下顕紀氏は、これは町人が新田開発によって生じる利益＝農業生産物のみならず、土地の金銭的価値に着目したからだとする。<sup>(29)</sup>

これに対し幕府は、形のうえでは町人請負新田の開発を禁じたが、実際のところは黙認状態であった。そのことについて木村礎氏は、町人請負の新田開発は、封建領主の支配体制を崩すほどのものではなく、耕作地の増加はむしろ年貢収入の増加につながる

ものであり、だから黙認したのだと指摘されている。<sup>(30)</sup>

そのためこの時期は、本来ならば開発に不向きな芝原の土地であつても開発されるという事態が発生したのである。同時にそれは江戸時代以前から継承されてきた山野のあり方が変更されることを意味した。地域の慣習で自由に林を採取することに改変がせまられたのである。

このような事態は徳丸原に関しても同様であり、だからこそ徳丸原の利用に際して野銭の上納が開始されたと考えられるのである。六か村の地域住民は、赤塚郷の時代からの慣習に任せて、徳丸原の林を自由に採草することが出来なくなった。利用に際しては一定の野銭を上納することが条件となつたのである。

では、野銭の上納の開始は地域住民の意識にどのような影響を与えたのであろうか。

野銭の上納という行為は、その額は低く、あくまでも用益権の標識という性格は強いにしても、徳丸原の利用における昔ながらの利用の慣習が変わつた一つの契機であつた。野銭の上納という義務を果たすことで、徳丸原の土地の林を利用できるといふ新たな秩序が形成されたのである。

そして、社会に対応し形成された新たな秩序は、地域住民の意識変化を促した。前述の通り、近世前期における六か村の地域住民の徳丸原に対する意識は、①徳丸原は六か村の住民が林場として利用し、②それは昔から続く当然のことというものであつた。

しかし、町人の開発化の動きは②を許さない方向へと進ませ、新たな秩序が形成された。これによって②の意識は改められ、野銭

の上納という義務を果たさねば利用できないという意識が芽生えたと考えられる。そして、そのことは裏を返せば、義務さえ果たせば、徳丸原利用の権利を得ることができるという意識も内包させたともいえる。

### 3 江戸町人の土地開発願いと地域の反対

元禄二年（一六八九）二月、江戸町人関口屋佐右衛門・遠州屋庄大夫の二人が、徳丸本村の東隣に位置する西台村の荒地を開発したいと代官所に願ひ出ており、次に掲げる文書はその際の願書である。<sup>(31)</sup>

#### 乍恐書付を以御訴詔申上候事

一 御代官所豊嶋嶋荒川通西台村野地之内、高五拾町新田ニ被仰付候儀、戸田領上青木村十兵衛・江戸馬喰町平野屋十右衛門と申者、兩人にて御訴詔申上候、式拾年以前戊ノ六月被為仰付、同年十月に開発仕候処ニ、翌年亥ノ八月満水ニ而耕作家共□□流、無是悲差上立のき申候、右之新田□□爾今荒地ニ而拾置申候、我等共ニ被仰付候者□□儀様御金拝借不仕、自分之金子ニ而當己ノ□□月之内仕立、三年過申・西両年迄反ニ付永□□文宛、戊年迄反ニ付永百文つ、未々迄無□□御上納可仕候、右之通被仰付被下候ハ、難□□奉存候、以上

元禄貳年

関口屋 佐右衛門 印

巳二月五日

遠州屋 庄大夫 印

御代官様

関口屋佐右衛門・遠州屋庄大夫の二人の商人は、以前に開発途中で断念され、今は荒地となっている土地を開発したいとしている。その際、開発費用は自分達で負担すること、また、三年後から一反につき永百文上納することを契約している。

この二人の商人がどのような人物かは不明であるが、江戸近郊の村の土地に着目して進出してきた者と思われる。また、開発を願ひ出た土地が、西台村のどのあたりかも不明である。しかし、以前に満水で流されたという記載から、川近くの低湿地付近だと推定される(図3の②部分)。

こうした願ひ出をうけて代官所は、西台村に対して事情を尋ねている。それに対し、西台村他九か村は、元禄五年(一六九二)三月、次のような返答書を提出している。

乍恐以書付ヲ御訴詔申上候事

武蔵郡 田領八ヶ村

川端芝地式百町余御座候所、右八ヶ

村秣場ニ而年々野錢差上ケ、御割付面ニ御座候、然処ニ旧冬ヨ

リ右之場所、江戸町人運上指上可申と奉願候旨承知仕候、右

場所之内新田ニ不成処大分御座候、右八ヶ村之儀者仲仙道下

板橋定助□□馬役相勤候ニ付、別而秣場不自山ニ御座候へ而

ハ難儀仕、加様之助成を以八ヶ村高六千四百四拾石之所、本

田御年貢諸役相勤、惣百姓かづめい、つなき罷有処ニ、新田訴詔

之者御座候旨承候ニ付、惣百姓無是非御訴詔申上候、困窮仕候

百姓ニ御座候、然其此上ハ右之場所式百町余之処、水損場ニ而

御座候得□□分一ハ畠ニも可能成場所御座候間開発仕、村並

下々畑之御年貢壹反ニ永三拾文程、相残三分二ハ芝地御年貢

江戸時代前・中期の入会地と地域秩序(若曾根)

壹反ニ永式拾文被仰付、両様共高石ニ御結被成可被下候、尤高役相勤可申候石盛之儀者御了簡次第ニ可被仰付候、右之場所をはなれ候へ而ハ、本田島作業□□成無御座候、新田訴詔之者ハ四百町茂可有様ニ申上候由及承候、私共内檢仕候所ニ式百五拾町計も可有御座候哉、其段者御檢地を請、何分ニ茂町歩御定被成可被下候、如此申上候段惣百姓迷惑ニ奉□□得共、若他所江茂可被仰付哉と難儀仕候ニ付御訴詔申上候、御慈悲を以村付相はなれ不申様ニ被為仰付被下候者難有可奉存候、以上

元禄五申年三月廿八日

上赤塚村

名主 新右衛門判

下赤塚村

名主 伊兵衛判

四ツは村

名主 次郎兵衛判

徳丸本村

名主 新兵衛判

同 脇村

名主 権左衛門判

同 脇村

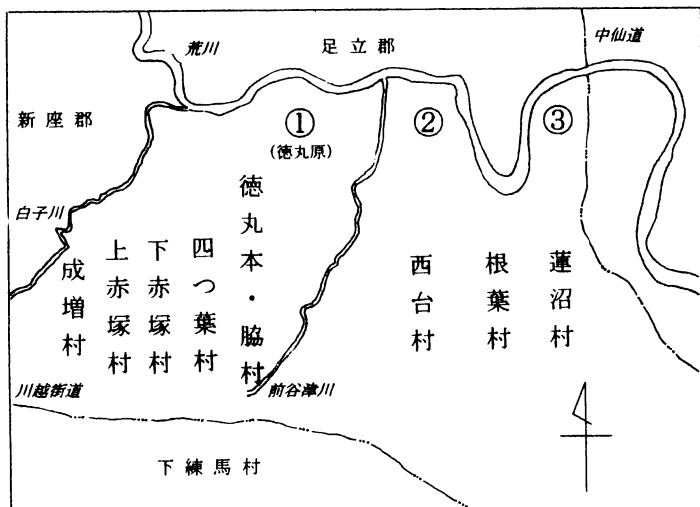
名主 五郎右衛門判

西台村

名主 五左衛門判

根葉村

図3 赤塚郷六か村と周辺村々



〔出典〕 国土地理院 明治13年11月「第一軍管地方2万分1迅速測図」より作成

#### 細井九左衛門様

御手代衆中

蓮沼村

名主 庄兵衛判

名主 三右衛門判

九二

ここでは、西台村のほか、赤塚郷六か村・根葉村・蓮沼村の九か村が連合し、名主の連印で「惣百姓迷惑」として町人による新田開発に反対している。この九か村は図3のような位置関係になっている。略地図上①部の林を赤塚郷六か村が、②部の林を西台村が、③部の林を根葉・蓮沼村の二か村が利用していた。そのため開発願いをうけている②部の芝原の開発が承認されると、周辺の林場も開発されるかもしれないと九か村は危惧し、「若他所江茂可被仰付哉と難儀仕候」として連合したのである。

反対理由としては、①年々野銭を上納してきたこと、②開発は不向きな土地柄であること、③中山道下板橋の助郷に定められ、伝馬役を勤めているので、林場不自由は難儀であること、④林場が開発されると、林を畑の刈敷として使用することができず、百姓が困窮してしまうことの四点をあげている。

しかし、反対はあくまでも町人による開発に対してであった。九か村は、自分達で開発をするという条件では、開発をある程度受け入れ、幕府との協調姿勢をとっている。九か村は、開発予定地の三分の一は開発して一反につき永三〇文、残り三分の二は永二〇文を上納するとしているのである。

また、九か村は検地の実施を要求した。不明確な芝原の町歩を

明確に定めてほしいとしているのである。

これらのことから以下のこと が指摘できる。

町人による開発への反対根拠として①の年々野錢を上納してきたことを九か村が挙げたのは、元禄元年からの野錢上納を九か村が徳丸原の用益権の標識として捉えたからこそといえる。元禄元年からの野錢上納の開始は、江戸時代以前からの徳丸原・六か村が自由に利用できる土地という慣習の変化の契機となった。それに伴い、六か村の地域住民は、野錢上納の義務が徳丸原の土地の利用の権利を得ることにつながるという意識をもつこととなった。そのために、野錢上納してきた事実が反対根拠に据えられたのである。

また、ほかの反対根拠として九か村は、②の土地柄の問題、および④の土地から生み出される価値の問題を挙げている。土地柄の問題とは、秣場は荒川の氾濫の被害を受けやすく、新田開発には不向きな土地柄ということである。また、土地から生み出される価値とは、秣が田畑の疇数となる価値をもつということである。つまり、芝原は九か村にとって開発されるべき土地ではなく、また開発できる土地柄でもなかったのである。九か村は九か村にとってあるべき芝原の環境を認識し、それに基づき開発すべきでない と判断したといえる。

しかし、九か村の住民は、開発不向きな土地柄の認識をもちながらも、ある程度の土地の開発を容認している。ここには、九か村の幕府との協調姿勢が示されている。九か村は、九か村の住民以外の者による秣場の利用を否定し、秣場を「村付相はなれ不申

様」にすることを目的としたのである。だからこそ九か村は開発に対して九か村自らの開発にはある程度受け入れの姿勢をとったのである。あくまでも九か村の目的は、芝原を地域の所持地とし、秣場として利用できるようにすることだったのである。

そして、それを実現させるために、九か村が要請したのが芝原の検地実施であった。九か村は芝原の土地の公定面積を定め、九か村の芝原に対する所有権を明確にしようとしたのである。

以上のような、町人の開発願いとそれに対する九か村の反対運動は、秣場への価値感が両者で異なったことによって生じたといえる。柳下氏が指摘しているように、江戸近郊の芝原は、江戸町人にとっては金銭的な価値をもつものであった。それに対し、六か村にとつての徳丸原は秣場としての環境にあることが価値だったのである。つまり、赤塚郷六か村という地域社会の住民による開発反対の訴えは、徳丸原を地域の所持地とし、徳丸原の環境を維持することが真の目的であったと評価できる。町人の開発願いを発端とした六か村の反対運動は、地域住民の芝原の環境認識に基づいて、地域が主体的に、地域にとつてあるべき環境の維持を図った運動だったのである。

#### 4 徳丸原の検地実施について

九か村の要請を受けて徳丸原の検地が元禄五年（一六九二）、代官細井九左衛門によって実施された<sup>33</sup>。徳丸原の土地は、上芝畑・中芝畑・下芝畑・砂芝畑の四通りに等級がつけられ、「新田芝畑」となった。石盛については、「石盛上式ツ半・中式ツ・下式ツ半・

表 3 五カ村入会芝畑反別割合

	上芝畑	中芝畑	下芝畑	砂芝畑	計
上赤塚村	1103.15	1323.07	665.07	214.06	3306.07
下赤塚村	1174.18	1408.13	780.14	228.00	3519.05
徳丸本村	822.13	986.05	495.25	159.20	2464.03
徳丸脇村	253.15	303.28	152.25	49.06	745.28
四つ葉村	248.29	298.16	150.03	48.10	759.14
計	3603.00	4320.09	2172.06	699.12	10794.27

〔出典〕「赤塚上下・徳丸三分五カ村入会芝畑内割覚」(安井家文書)

砂沓ツ」としている。新田芝畑の年貢負担は表3の通りである。また、徳丸原における各村の所有反別内訳は表4に示したとおりである。各村の村高に応じた割合で、徳丸原における所有反別が決定されたのである。しかし、この時期においては、実際にどこからどこまでが、この村の所有という形に境界されたわけでは

表 4 新田芝畑の年貢

	土地面積	納入額(一反当り)	取 永
上芝畑	3603.00	35文	12貫611文
中芝畑	4320.09	25文	10貫801文
下芝畑	2172.06	20文	4貫344文
砂芝畑	699.12	5文	350文
計	10794.27		8貫106文

〔出典〕「赤塚上下・徳丸三分入会芝地新田年貢割付状」(安井家文書)

なく、あくまでも入会利用の形態がとられていた。

元禄検地は、①徳丸原における各村の所有反別を明確にし、②徳丸原利用に際して赤塚郷六か村が幕府に年貢を上納することを決定させた。①の各村の所有反別の明確化は、徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地の公的な認定が与えられたことを意味する。そしてその認定をうけるための六か村の義務として、②の年貢上納が決定されたのである。

つまり、六か村は、年貢上納の義務をもって、幕府から徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地としての認定を得ることとなったのである。これは幕府と地域の契約として位置づけられる。徳丸原をめぐる幕府と地域は、契約関係をもつこととなったのである。

この契約成立は、徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地の実現につながる。そのため、これ以降六か村は、六か村の最大の目的である徳丸原の地域住民にとつての環境維持の動きをみせると考えられる。どういった秩序をもつてそれを実現したのであろうか。次節でみていくこととする。

三 赤塚郷六か村の地域秩序と環境維持

1 郷請から村請へ

赤塚郷六か村は幕府との契約を成立させるために、徳丸原利用に際しての年貢上納を行うことになったのであるが、その納入方法についてみていく。

「新田芝畑のわけ」の四条目には「元禄七戊午方御取ケ、五ヶ村出合割合申事、年々難義奉存候間、御願申上、村高ニかけ、村々

御割付へ村切りニ反歩申請」とある。元禄七年（一六九四）までは五か村による一括上納であつたが、それが次第に困難となり、元禄七年（一六九四）以降は各村で納入することとなつたのである。元禄七年までの六か村が一括して年貢を納入する方法は、元禄元年以降の野銭の上納についても同様であつたと考えられる。

このような地域による年貢納入は、村を単位とした年貢上納を「村請」ということに対応して、赤塚郷を単位とした「郷請」と位置づけられよう。つまり元禄七年に郷請から村請へと変わったのである。

郷請から村請への変更は、「五ヶ村出合割合申事年々難義」だからこそ行われたことであり、それは六か村自らが選択したことであつた。六か村は、六か村を単位とした郷請よりも、寛文・延宝期に成立した村を単位とした村請での年貢上納の方が合理的と判断したのである。つまり年貢納入という義務を果たすためのシステムのあり方を、六か村が主体的に判断・変更したのである。そしてそのシステムにおいて、義務を担うこととなつたのは、村請のシステムである。村請が徳丸原・六か村の共同所持地の権利を得るための義務を果たす役割を担つたのである。

## 2 徳丸本村の林場管理の村定

徳丸原の林の管理はどのように行われていたのであろうか。それを示すため、享保一八年（一七三三）年三月、徳丸本村の住民五十四人が盗みに関して相談・連印し作成した議定書の一部をみていく。<sup>(36)</sup>

### 相定申村相談之事

一村方二而前々諸法度相極メ申候処ニ、近年みたりニ罷成候ニ付、此度相談仕、田畑・山林・畑境ニ而木をきり、或ハ枝を折、諸作荒候者不及申、下草・葉ニ而もぬすみ取申間敷候、如此相談相極メ申上者、万一石之類ぬすみヶ間敷儀仕候ハ、過金老分宛急度相出し可申候、若過金及遅滞申候ハ、五人組中間ニ而急度弁相出し可申候、か様ニ相談相極メ申上者、田畑其外山林ニ而もぬすみ仕候者見付ヶ候ハ、見のかしニ不仕、急度改、過金の儀者見付ヶ候者方江出させ可申候、為後日村相談、仍如件

享保十八年丑三月

新右衛門印

（以下五人連印略）

ここでは、盗みについて以前から村方において諸法度で取り決めているのにもかかわらず、近年守られずみだりになつてきている実態を改善するために、以下のことが定められている。田畑・山林・畑境にて木を切つたり枝を折つたりするのは勿論、下草場でも盗みは禁じる。違反者は罰金一分を払い、もしもそれが延滞したならば五人組が弁済すべきだとしている。また、違反者を見つけたら決して見逃さずに改めるようにし、見つけた者は違反者が支払つた罰金を受け取ることができるとしている。

規定によつて村内の盗みを禁じて取り締まり、住民の生産活動に支障をきたさないようにしている。村共同体が住民の生活保障のために機能していたのである。

また、違反者から過料をとつており、村が盗人に対して制裁を

加える主体として機能していたことが伺える。

澤登寛聡氏は、村を、①村請事務や自治的な固有事務の行政執行を示すものとして、②村法の作成を村が自治立法権の主体であったことを示すものとして、③そして共同体制裁の存在を村が自治司法権を保有していたことを示すものとして捉えた。そこで氏は、村は当時の人々にとつての最も基礎的な自治体であつた位置づけられている。

氏の指摘をもとにすると、村内における盗みを取り締まるために、村が主体的に作成したこの村法は、自治立法権を示すものとして捉えられる。また、村法の違反者に対して制裁を加える主体として村が機能していたことは、村の自治司法権の存在を示すものである。よつてこの史料は、村が村内の秩序を維持するために政治組織として機能していたことを示していると評価できる。

そして、村の政治組織としての働きは「下草・葉二而もぬすみ蒔取申間敷候」とある通り、芝原にも目が向けられている。徳丸原の稗の管理が、村主体の自治をもつて図られていたことが示されているといえよう。

### 3 赤塚郷六か村の徳丸原管理

赤塚郷六か村は地域ぐるみで、徳丸原に関してどのような取り決めをしていたのであろうか。寛延二年（一七四九）三月、寛永寺領四ツ葉村の芝畑地に際して、六か村の名主・年寄・百姓代が相談し作成した証文の第二・三条には以下のようにある。

一<sup>32</sup> 芝畑付田畑・芦野等より芝畑江切添立出堅仕間敷候

一<sup>3</sup> 右五ヶ村二住居致候百姓・水呑之外、他村に住居致候而越

石之百姓一切秣からせ申間敷候、勿論縁辺成共他村之者江秣壁等一切為取申間敷候

ここでは、①芝畑付近の田畑や芦野などから芝畑への切添えの禁止、②六か村に住む百姓・水呑以外の者による秣採草の禁止が定められている。

六か村の住民に対する徳丸原の勝手な開発の禁止は、徳丸原はあくまでも六か村の共同所持地であり、六か村の地域住民で利用すべきものであるという理念を示している。徳丸原は、個々の地域住民が私土地として、開発・使用することは許されなかったのである。

また、外部——他地域・他村——に対する秣採草の禁止は、幕府から得た徳丸原＝六か村の共同所持地の公的認定を掲げたものである。他村に住む越石の百姓、および縁者であっても、他村の者ならば採草が禁じられている。このことから、徳丸原の稗の利用は、六か村の住民の特権的なものとして認識されていたことが示されている。

つまり、幕府との契約で得た徳丸原という土地は、六か村の共同所持地であり、地域住民のための土地であった。私の土地として利用することは許されず、また他地域の住民による利用も許されなかった。あくまでも、地域住民の秣場として機能されたのである。これによって、この地域の取り決めは、六か村が地域ぐるみで徳丸原の秩序の維持を図っていたことを示しているといえよう。



## 4 享保改革期の徳丸原開発

元禄期以降、赤塚郷六か村は芝畑年貢の上納の義務を果たすことで、徳丸原を共同所持地として利用する権利が保障された。しかし享保改革期になると、幕府の財政再建を目的とした新田開発の動きが活発になってくる。

享保七年（一七三二）六月、代官所は徳丸原の開発可能地を開発するよう指示した。それに対し、上赤塚村・下赤塚村・徳丸本村・脇村・西台村の名主と年寄は請書を提出した。次の史料はその一部である。

はけ田領五ヶ村新田芝畑之儀、去<sup>（享保六年）</sup>丑秋方御高御除キ、草銭計ニ被為仰付被下候様ニ度々御願申上候所ニ、此度御吟味之上、右芝畑之内、畑ニ茂可成分開発仕候様、被仰付候間、拙者共内見分仕相改候所ニ、右書面之通り、五ヶ村所々ニ而五丁五反歩開発可仕候、残百三十四丁九反五畝九歩ハ馬草場ニ而、先年之通り草銭計御上納仕度奉願上候、然共畑開発之義、荒川端堤外深水入ニ御座候へハ、拾ヶ年ニ忝度も作毛取可申哉難計奉存候、堤被仰付被下候様ニ奉願度候へ共、開発場所少々ニ御座候故、御願難申上奉存候、御慈悲を以、五ヶ村惣百姓助ニ罷成候様ニ被為仰付被下候様ニ難有奉存候、以上

新田芝畑について我々は、享保六年（一七二一）秋から、高を除き野銭での上納を度々願ひ出していた。しかしこの度、徳丸原において畑になりそうな土地を開発するよう仰せつけられた。そこで村方で見分したところ五丁五反歩は開発が可能であるが、残り

の一三四丁余りは開発が不可能であり、秣場として先年のように野銭で上納したい。また、開発する場合は、荒川端の堤の外で深く水が入るところなので、十年に一度も作物をとることができない。そこで本来なら堤の築造を願ひ出たいところであるが、開発地は少ないのでそれは申し上げにくいことであると代官所に訴えている。

幕府の新田開発の要請を受けて五か村の村役人は、開発の容認地を五丁余り、開発拒否地を百三十三丁余りとしている。幕府に対してある程度の新田開発の受け入れ姿勢は示しているが、それは形ばかりのものであることが伺える。理由としては開発不可能な土地状況を挙げている。どうしても土地を開発するというならば、堤の築造が必要だとしている。

また、再度の野銭上納を要求している。これに示されることは、当然のことながら六か村にとって徳丸原を利用するに際しての年貢上納は、野銭上納よりも負担が重かったということである。つまり元禄期の高請化の要求とそれに伴う年貢上納の開始は、あくまでも徳丸原六か村の共同所持地の権利を確固たるものにするためのものであったといえよう。

こうした再度の野銭上納の要求は「去<sup>（享保六年）</sup>丑秋方御高御除キ、草銭計ニ被為仰付被下候様ニ度々御願申上候」とあるように、享保七年以前にも度々行われていた。享保六年（一七二一）一月、上赤塚村・下赤塚村・徳丸本村・脇村の名主・年寄が代官伊奈半左衛門に願書<sup>（40）</sup>を提出しており、その第二条目と三条目によれば以下のように記されている。

一<sup>(2)</sup> 元禄元年辰年西山六郎兵衛様御支配之節、御改被遊候而町歩見積りを以書付差出シ候様被仰付候ニ付、則拙者共大積百四拾町歩程と申上候、依之沓反ニ永式文宛ニ芝錢上納被仰付候事

一<sup>(3)</sup> 同五申年三拾年以前、細井九左衛門様御支配之節、町人新田ニ御願申上候ニ付、右五ヶ村之儀者下板橋町定助之御役相勤候ニ付、此場所ニはなれ候而ハ、御役耕作仕付も難成、難義仕候ニ付、無是悲何分ニも村附ニ被仰付被下候様奉願候処ニ、則申ノ年、細井九左衛門様御檢地御入、新田芝畑御高御結、上芝畑沓反ニ永三十五文、中芝畑沓反ニ式拾五文、下芝畑沓反ニ廿文、砂芝畑沓反ニ五文、如此四通り被仰付候、申年より今迄御年貢上納仕候、此場所悪場故、前々御見捨ニ御座候所ニ、御高入ニ被仰付難儀仕候、別而当年之儀者、度々之出水ニ而前後六十日余た、

へ申ニ付、秣肥一切取不申皆無仕候、依之当年芝畑御年貢御赦免被遊被下來候、御高御除キ、何分ニも御慈悲を以、芝錢計被仰付被為下候様ニ惣百姓奉願上候、以上

第二条目、および三条目の始めには、徳丸原利用に際する野錢上納の開始と町人による開発願を発端にして徳丸原の高が決定された経緯について記されている。

そして村々は、徳丸原は高請され年貢を上納することになったが、この地は土地柄が悪いために百姓が難儀しているとしている。また、享保六年は度々川が氾濫し二ヶ月余りも冠水、秣を一切刈ることが出来なかった。よって芝畑高請地の免除、および再度の

野錢の上納を願ひ出ている。

始めの野錢の上納の開始から徳丸原の高請化までの経緯は、六か村と幕府の徳丸原をめぐる契約成立までの由緒であり、つまり秩序形成の過程である。これが徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地であることの根拠として作用した。そして六か村は芝畑高請地の免除、および再度の野錢上納の開始を願ひ出た。この願ひは困窮している六か村の地域住民の負担を軽減するためであった。

つまり、六か村は、徳丸原の環境を維持するための秩序——義務を果たしたうえで徳丸原の利用の権利を得る——として、芝畑年貢上納の義務を果たしてきた。しかし六か村の地域住民にとって、年貢上納という行為は決して楽なものではなかったといえる。これによって、享保六年に六か村はより負担の軽い野錢での上納を要求したのである。

このことは、六か村が徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地の権利を保持したうえで行った負担軽減運動であった位置づけられる。徳丸原をめぐる六か村と幕府の契約成立までの由緒を記し、徳丸原Ⅱ六か村の共同所持地という権利を示したうえで、現状の負担の軽減を願ひ出たのである。そして徳丸原利用の権利を支えていたのは村の支配の末端組織としての働きであったことはいうまでもない。

以上のことから、享保改革期に、六か村が主体となって、地域住民の負担軽減を図る働きをみせたことが指摘できる。そして、それは村の村請事務の働きがあつてこそ成しえたものであつた。六か村の秩序が、各村の政治組織としての働きによって維持され、

その上で六か村が地域単位で、地域住民にとって住みよい空間を構築するために働いたのである。

## 5 伊奈半左衛門の伺書

赤塚郷六か村の再三の願い出を受けて代官伊奈半左衛門忠達  
は、享保六年（一七二一）十一月、勘定所に次のような伺書を提出している。

一 刷毛田領村々芝畑年貢之儀、書面之通り相願候、先月廿六日拙者儀彼地江相越候ニ付、場所不殘達見<sup>（分）</sup>□吟味仕候所ニ芝地ニて差置、馬草ニ致し仕候段紛無座候、畢竟先年江戸町人江相渡り候而ハ馬草ニはなれ、□板橋江助郷相勤候ニ難儀仕候ニ付、無是悲村方江引請、畠年貢差出候儀ニ御座候、只今迄壹歩之所茂開發者不仕候、依之此度先規之通り高御捨、芝畑年貢御免被成、芝錢差出候様ニ相願申候所、芝錢先年西山六郎兵衛支配之節、壹反ニ付永弐文つ、申付候得共、此度高御捨被下、先規之通り芝錢被仰付候得ハ莫太之御救ニ御座候ニ付、拙者了簡を以近村芝<sup>（並）</sup>□並壹反ニ水拾文つ、來寅年方上納仕候様ニ可申付候と奉存候、如何可被仰付哉奉伺候、以上

ここで伊奈半左衛門は、以下のように述べている。先年、徳丸原は芝畑となり、住民は芝畑年貢を納めてきたが、開発は今まで行われてきていなかった。よって以前のように高外地にして芝畑年貢を免除し、野錢上納にしてはどうか。野錢は西山六郎兵衛支配の時は一反に付き永弐文であったが、この度高外地とすること

自体大きな救いなので、拙者は近村の芝錢並に一反につき一〇文の上納としたいと考える。

この伺書は、先の六か村の願い出が反映されたものである。永一〇文の上納というのは、以前に比べれば五倍の額ではあるものの、地域住民にとっては年貢上納よりは負担の軽いものであった。六か村の徳丸原をめぐる秩序実現のうえで、六か村の負担軽減の訴えかけは、幕府政策にも影響を与えていたのである。

## おわりに

本稿では地域に焦点をあて、それを自治の視点から捉えてきた。以下に簡単にまとめ、明らかにされたことを示す。

第一節では、赤塚郷六か村の歴史的変遷について考察した。入会地利用を一つの契機として形成された六か村は、江戸時代以前は赤塚郷を構成していた。つまりこの六か村は、郷の地域的な枠組みを、徳丸原の秣の入会利用という行為を一つの契機として継承した地域だったのである。

第二節では、徳丸原をめぐる六か村の慣習・秩序を示した。

徳丸原の利用の形態は、赤塚郷の時代から元禄期に至るまで変化しなかった。赤塚郷の地域住民が、慣習に従って自由に秣を採草していたのである。それによって、赤塚郷の地域住民は、徳丸原は赤塚郷の共同所持地であり、秣場として利用されるべき土地・環境であるという意識をもったと位置づけた。

しかし、自由な秣採草の形態の慣習は、元禄期になると変更を余儀なくされた。江戸町人の開発運動の活発化という経済社会の

状況によって、野錢上納が開始されたのである。このことは地域住民に、義務を果たせば徳丸原の利用の権利を得ることができるという意識を芽生えさせた。その意識は享保期に至っても継承されていくものであり、徳丸原開発の反対根拠を支える深部に位置づいていたといえる。

こうした中で、土地の金銭的価値に着目した江戸町人が芝原の開発を願い出た。それに対し六か村は、野錢上納をしてきたことを一つの根拠として反対を訴え、徳丸原の地域所持化をめざした。地域住民にとって徳丸原は、開発されるべき土地ではなく、秣場として利用されるべき土地であり、その環境こそが地域住民にとっての徳丸原の価値だったのである。つまりこの一連の動きは、江戸町人と六か村の地域住民の芝原に対する価値の相違から生じたものであった。よって元禄期の九か村の開発反対の動きは、地域住民による、徳丸原の環境認識に基づいた、環境維持の運動だったのである。

この六か村の環境維持運動をもとにして、元禄検地が実施された。そこで六か村は、年貢上納の義務を果たすことで徳丸原を共同所持地とする権利を得るという契約を幕府と結んだ。徳丸原を地域の所持地として公認されることは、徳丸原の環境維持のための前提条件であった。これに基づいて地域は環境維持のために、秩序を形成していくこととなったのである。

第三節では、その秩序について具体的に示した。

六か村の秩序は、義務を果たして権利を得るという契約に基づいたものである。その義務を担っていたのが寛文・延宝期に成立

した村請制村落であった。村の、支配の末端組織的な要素によって、地域の秩序の深部が支えられたのである。

また、村の自治的側面の働きは、徳丸原の秣の管理面で見受けられた。村の政治組織としての働きをもって、徳丸原の秣の管理が行われたのである。

六か村の地域を主体とした働きは、六か村の各村が義務を果たしたことを前提条件として実現された。徳丸原の土地の秩序として、地域内部の住民には私的土地利用を、また地域外部の者に対しては秣の採草を禁じたのである。

また、徳丸原を地域の所持地として維持した上で、六か村の地域は、住民の暮らしの負担を軽減させるための働きもみせた。六か村は、徳丸原の秩序を形成したうえで、地域住民の住みやすい空間を構築する働きを示したのである。

以上のように、赤塚郷六か村は、村の政治組織としての自治的な働きと、支配の末端組織的働きの両側面の働きをもって、徳丸原の環境維持のための秩序を形成した。徳丸原という空間の六か村にとってあるべき環境を、六か村の地域住民が認識し、それに基づいて地域住民が主体的に秩序を形成したのである。

はじめに筆者は、地域社会の自治について、「地域社会の有する自治を、地域内の一定の空間についての地域住民の認識を基に、地域住民の意識が反映され、新たな秩序が主体的に形成されていく状態に見出される」と定義した。つまり、徳丸原＝秣場としての環境であるべきという地域住民の認識を基にした、地域の徳丸原をめぐる新たな秩序の形成・維持は、地域主体の自治であった

と評価できる。地域の自治をもって、徳丸原の地域住民にとっての環境が維持されていたのである。

# 註

- (1) 水林彪「近世の法と国制研究序説」(一) (六) (『国家学会雑誌』九〇巻一・二号、五・六号、九一卷五・六号、九二巻一・一二号、九四巻九号、九五巻一・二号、一九七七・八二年)、同『日本通史Ⅱ 封建社会の再編と日本の社会の確立』岩波書店。
- (2) 水本邦彦「村社会と幕藩体制」(一九八三年度歴史学研究大会大会報告別冊特集号)、同『近世の村社会と国家』(一九八七年 東京大学出版会)。
- (3) 深谷克己「百姓」(『歴史学研究』別冊大会報告特集一九八〇年)、同『百姓成立』(一九九三年 塙書房)に所収。
- (4) 大塚英二「近世期の入会山争論と地域構造―遠州金谷地方の事例―」(『愛知県立大学文学部論集』四八号、二〇〇〇年)。
- (5) 小暮正利「元禄期以降における荒川低湿地の林場について―徳丸原を事例として―」(『駒沢史学』五十五号、二〇〇〇年)。
- (6) 天正三年(一五三四)「四月二日付檀那願文」(『米良文書』『板橋区史』資料編2古代・中世・No.二五〇)。
- (7) 『新編武蔵風土記稿』豊島郡巻六。
- (8) 同右。

江戸時代前・中期の入会地と地域秩序(若曾根)

- (9) 東京市役所編『小田原衆所領役帳』一九三六年。
- (10) 前掲註(7)に同じ。
- (11) 小松寿治「中世赤塚郷の景観」(『駒沢史学』第五十五号二〇〇〇年)。
- (12) 「比志島文書」(『板橋区史』資料編2古代・中世・No.二二四)。
- (13) 同註(9)に同じ。
- (14) 中野達哉「近世初頭武蔵における板倉重勝の検地と代官支配」(『いたばし区史研究』第六号、一九九八年)。
- (15) 慶長三年(一五九八)十月「武蔵国豊島郡赤塚上郷松月院寺領帳」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.四九七)。
- (16) 寛文十年(一六七〇)十月「徳丸村年貢割付状」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一九三、寛文一一年(一六七二)、十月「徳丸本村亥之御年貢可納割付之事」(『安井家文書』)。
- (17) 前掲註(7)に同じ。
- (18) 藤田覚氏は、元禄検地によって確定された高の内、改出高に關しては、それを村高に加えることは許されていなかったと述べている(藤田覚「国高と石高―天保郷帳の性格―」『千葉史学』四号)。
- (19) 前掲註(7)に同じ。
- (20) 同右。
- (21) 同右。

- (22) 『板橋区史』通史編上巻(板橋区史編さん調査会、一九九九年、四四三頁)。
- (23) 同右、四三六～四四三頁。
- (24) 古島敏雄『近世日本農業の構造』(東京大学出版会、一九五七年)。
- (25) 藤木久志『村と領主の戦国世界』(東京大学出版会、一九九七年)。
- (26) 高木昭作『日本近世国家史の研究』(岩波書店、一九九〇年)。
- (27) 慶長三年(一五九八)九月「徳丸村検地帳」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一六七)。
- (28) 貞享〓元禄年間(一六八四～一七〇四)「新田芝畑のわけ」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一二七)。
- (29) 柳下顕紀「江戸住民の新田投資行動に関する一考察―下総国椿神新田を中心に」(『法政大学大学院紀要』四一号)。
- (30) 木村礎『近世の新田村』(吉川弘文館、一九六四年)。
- (31) 元禄二年(一六八九)二月「西台村野地開発につき願書写」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一二八)。
- (32) 元禄五年(一六九二)三月「上赤塚村など八ヶ村秣場開発許可迷惑につき願書写し」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一二九)。なお、原文では差出人が三段に記載。本書では紙面の都合上、原文の最上段より各段右端から左端の順で記載した。
- (33) 前掲註(7)根葉村の項に「原村の東に添て南の方志村に及び、西は西台村に界ひ、北は荒川に邊す、廣さ凡東西一里南北二十丁許、當村蓮沼二村入會の持なり」とある。
- (34) 前掲註(28)に同じ。
- (35) 「郷請」の概念については、澤登寛聡先生より御教示を仰いだ。
- (36) 享保十八年(一七三三)三月「伐木・諸作荒し禁止など徳丸本村相談取決につき一札」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.三〇六)。
- (37) 澤登寛聡「割元制と郷村の自治秩序 寛文・元禄期の武蔵国多摩郡三田領吉野家の直轄地域を素材として」(『法政史学』第五四号 二〇〇〇年)。
- (38) 寛延二年(一七四九)三月「徳丸三分・赤塚上下入会芝畑のうち四ツ葉村分検地につき証文写」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一三四)。
- (39) 享保七年(一七二二)六月「峡田領五ヶ村新田芝畑開発につき願書下書」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一三三)。
- (40) 享保六年(一七二一)十一月「赤塚上下・徳丸三分五ヶ村入会芝畑高入御免願写」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一三二)。
- (41) 享保六年(一七二一)十一月「峡田領村々芝畑年貢につき幕府代官伊奈半左衛門伺書写」(『安井家文書』『板橋区史』資料編3近世・No.一三二)。